



営農情報

第98号 令和2年8月3日

南筑後・久留米普及指導センター
福岡大城農業協同組合

「あまおう」8月の管理

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

この資料は令和2年7月22日現在の登録資料に基づいて作成されています。農薬使用の際にはラベルや袋に記載されている適用作物などの登録内容と有効年月を確認してください。

現在の苗の状況と気象の経過

【生育概況】

7月上旬の大雨や悪天候が続いたことで、根傷みの発生や軟弱徒長ぎみの苗が見受けられます。梅雨明け後の高温で、苗の萎れが懸念されますので、発根剤の使用や少量多回数かん水によって根の回復を促し、充実した苗作りを行いましょ。

【病虫害発生状況】

6月上旬からカキノヒメヨコバイによる被害が多く、ハダニ類やアブラムシ類の発生も散見されます。また、7月上旬の大雨により、一部のほ場で炭そ病が発生しています。

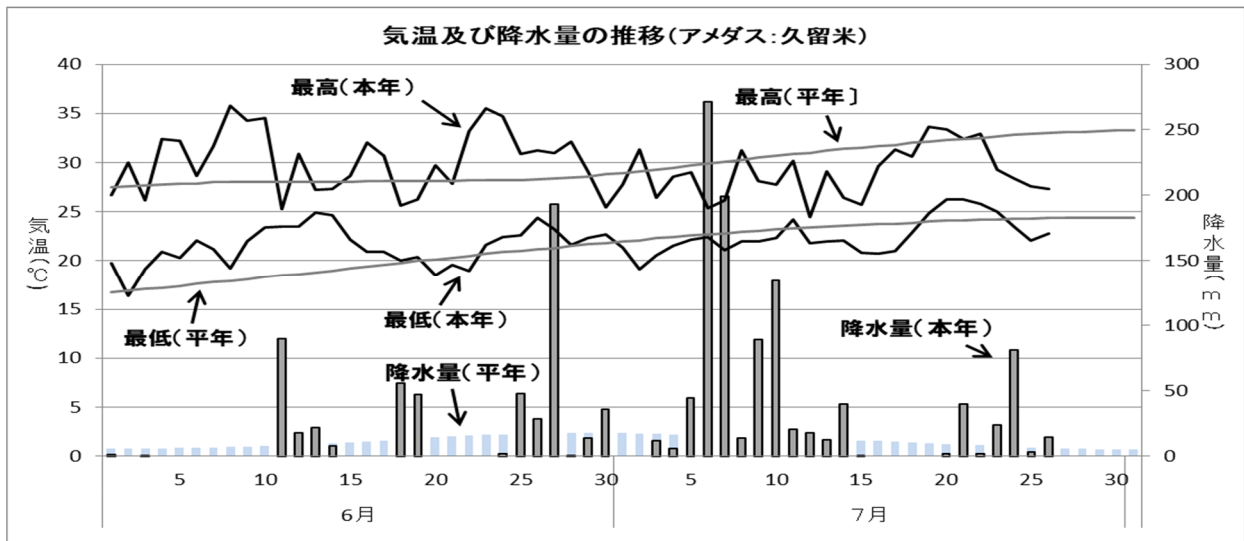


図1 気温及び降水量の推移 (アメダス久留米)

気象予報と今後の見通し

【気象予報】福岡管区気象台が発表した1か月予報は次のようになっています。

期間の前半は平年に比べ、曇りや雨の日が多く、気温が低い予報です。後半の気温は平年並みか高く、向こう1か月の降水量は平年並みか多い予報です。

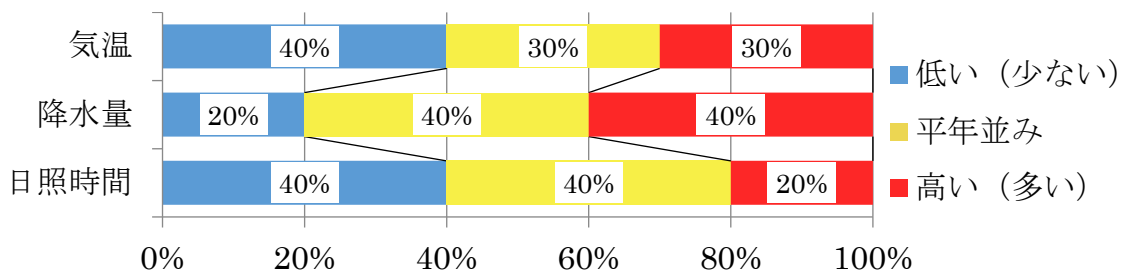


図2 1か月予報 (予報期間: 7月25日~8月24日 発表日7月23日)

育苗期管理のポイント

表1 育苗期後半管理のポイント

[ポイント]	[対 策]
①花芽分化を遅延させない	①寒冷紗で被覆することで、苗の温度を下げる。 被覆する時期 (株冷) : 株冷入庫前(5~7日前) (夜冷) : 処理期間中(但し、日中35℃以上の高温になる場合) (普通ポット) : 8月下旬から
②育苗期後半に窒素切れさせない	②窒素の効き具合を観察して、不足している場合はかん注や葉面散布によって追肥を行う。
③炭そ病、疫病の発生防止	③定期的な薬剤散布、発病株とその周辺株のほ場外への持ち出し。

育苗管理

【 作型 】

- クラウン径 10mm 以上の充実した苗が目標。クラウン径が 10mm 未満の苗は、無理して早い作型にせず、苗の充実を優先させる。

表2 「あまおう」の作型別、処理期間と定植日及び収穫開始の目安

作型	入庫	出庫	定植予定日	陽光処理	収穫開始
株冷Ⅲ型	8月20日	9月12日	9月12日～	3回	11月上旬
株冷Ⅳ型	8月27日	9月17日	9月17日～	2回	11月中旬
株冷Ⅴ型	9月1日	9月19日	9月19日～	1回	11月下旬
夜冷Ⅲ型	8月18日	9月10日	9月10～14日	—	11月上～中旬
夜冷Ⅳ型	8月23日	9月15日	9月15～18日	—	11月中旬
普通ポット			9月20～25日	—	12月上～中旬
普通晩期(厳寒期安定出荷を目的)			9月26～28日	—	12月下旬

【 施肥 】

- 根傷みしている場合は培土への追肥を控え、根が回復するまで葉面散布を行う。
- 作型に応じて最終追肥時期を決め、計画的に施肥を行う。
- ポットが小型なほど、薄い濃度で間隔を短くし、肥料が切れすぎないようにする。

表3 液肥の最終追肥時期の目安

作 型	3.5寸鉢	3寸鉢
株冷Ⅲ型(8月20日入庫)	8月 1日	8月 5日
株冷Ⅳ型(8月27日入庫)	8月 5日	8月10日
株冷Ⅴ型(9月 1日入庫)	8月10日	8月15日
夜冷Ⅲ、Ⅳ型(8月中下旬処理開始)	処理 10日前	処理 5日前
普通ポット	8月25日	8月30日

【 葉かぎ 】

- 1回当たりの葉かぎの数は2枚以内とし、葉かぎ後は3.5枚程度となるようにする。
- 葉かぎ作業直後は、「炭そ病」の予防散布を必ず行う(傷口からの感染防止)。

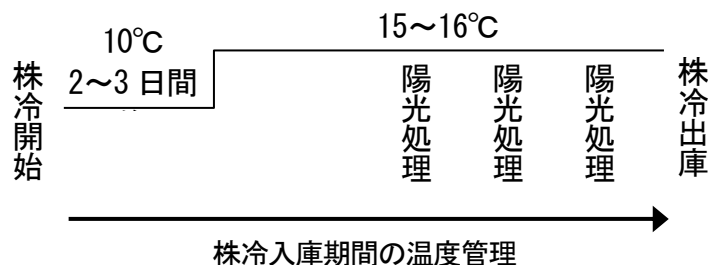
表4 最終葉かぎ時期の目安と葉数

作型	最終葉かぎ時期と葉かぎ後の葉数
株冷	入庫10日前に3~3.5枚
夜冷	処理開始5日前に3.5枚
普通ポット	8月30日頃に3~3.5枚

【 低温処理 】

○ 株冷処理

- 株冷処理の間に苗が消耗するため、充実した苗を使用する。
- 株冷入庫時に葉柄中の窒素濃度が 25～50ppm になるよう、肥培管理を行う。
- 冷蔵庫内の湿度に注意し、湿度 90%以上になるようにする。特に、冷風が直接当たる部分は乾きやすいので、ダンボールや厚紙で風よけをする。



● 陽光処理

- ① 株の消耗を抑えるため、晴天日に苗を庫外に出し、日光に当てる。入庫 10 日前後に 1 回目を行い、その後 2～3 日間隔で計 3 回程度行う。
- ② 出庫時間は 1 日 8 時間以内とし、乾燥しないようにかん水を行い、株の温度が下がった夕方（午後 6 時頃）～翌朝（午前 6 時頃）に再入庫する。（冷蔵庫内の温度上昇・蒸れを防ぐため）

表 5 株冷入庫 10 日前の体内窒素濃度による管理

体内窒素
25ppm
25～100
100～250
250～500
500ppm

○ 夜冷処理

- 処理期間中に肥料切れしないよう、処理開始時は 150ppm 程度の体内窒素を確保する。
- 入庫時の庫内温度は 13°C±2°C とする。
- 入出庫時間の目安は、午前 10 時に出庫、午後 6 時に入庫とする。気温が高い場合、入庫が早いと庫内の温度が下がりにくいため、入庫時刻を遅くする。（8 時間日長を基本とするが、10 時間以下であれば問題は生じていない）
- 処理期間中には、かん水や薬剤散布は行うが、摘葉はしない。

本田準備

例年、8 月中旬以降の天候が安定しないため、早めに準備しましょう。

【 畝立て 】

- 畝は、根が張るスペースを確保し排水性を高めるため、高さ 20～25cm 程度が望ましい。
- 耕うん時、ロータリーの爪に土が付かない程度の土壌水分状態で耕うんする。
- 畝立て後はビニルのべた掛けを行う。

病虫害防除

- 薬剤散布は、早朝もしくは夕方散布を基本とする（日中の高温時は薬害発生のリスクが高まる）。
- 本田にハダニ類、うどんこ病、炭そ病を持ち込まないために、早期作型では低温処理直前（最終葉かぎ後）の防除を徹底する。うどんこ病・炭そ病の罹病株は入庫しない。

トピックス「土壌消毒を徹底しましょう！」

春先以降、本ぽでセンチュウや萎黄病などの土壌病害虫による生育不良や枯死等が散見されました。前作で発生が確認されたほ場では、下記を参考に土壌消毒による対策をお願いします。今回紹介するのは薬剤処理に関する簡単な情報のみとなりますので、詳細またはその他の処理につきましては、JA、もしくは普及センターまでご連絡ください。

(1) クロルピクリン錠剤

- 【対象病害虫】 萎黄病、炭そ病、疫病、センチュウ類
【剤の特徴】 1錠ごとに水溶性フィルムで包装されており、施用後3～6時間で含水膨潤・溶解状態となり、ガスの放出が始まる
【経費】 約8万円/10a、畝上30cmおきに1錠散布（約6000錠/10a）

	基肥散布
	8月に定植畝を成形後、畝上30cmおきに1錠散布し、フィルム被覆して処理を行う。処理期間は15～20日とする。 ※ビニルが錠剤に直接接触すると、穴が開く恐れがあるため、錠剤を散布後、カルチで土をかけて被覆する。
	被覆をはぎ、臭いが残っていないことを確認し定植を行う。

※ガスの放出、刺激臭があるため、住宅の近隣では使用しないようにする。

(2) クロピクフロー

- 【対象病害虫】 萎黄病（20～30L）、ネグサレセンチュウ（20L）
【剤の特徴】 被覆資材の被覆後、かん水チューブを用いて処理するため、処理時の刺激臭が少ない。液肥混合機で処理できるため作業が簡単。
【経費】 約4万5千円/10a、（処理量：20L/10aの場合 ※15L/缶）

	基肥投入、畝たて、カルチ後に、かん水チューブを設置し、ビニルなどで被覆する。
	液肥混合機を使い注入する。故障・薬害防止のため、投薬時間と同程度、水を注入し続けることでかん水チューブを洗浄する。
	処理期間は15～20日間とする。チューブとビニルが癒着しないように、処理期間中1週間に1度わずかの時間、水を通す。
被覆をはぎ、臭いが残っていないことを確認し定植する。	

※ガスの放出、刺激臭があるため、住宅の近隣では使用しないようにする。

※処理液が水路に流れ込まないように注意する。